

わたしの兵隊手帳 (一五) 赤谷明海

〆昭和二〇年九月十八日の項につづく

〇空腹、小食で極く健全かに見えただ胃腸も、昨夜より下痢。何に依るか判らないが、脱肛のために、少し下痢すると肛門に緊りがなくて困る。(九、二五)

〇後送に就いては悲觀的情報の方が多い。梨が食へないと観念すれば、次の望みを柿、茸、栗、やがては正月の餅へと懸けるのであるが、この最後の望みさへも、叶ふかどうか判らないらしい。(九、二五)

〇九月二十七日。下痢状況悪し。肛門脱出して緊縮力をなく、粘液常に漏出す。

〇院内の静寂に住居してゐれば、自ら院外もかく平穩なのかと思はれるが、事實は相当暗黒らしい。

・新四軍へ揚子江筋の共産軍へ其の他雑軍のバックへ原漢字・はびこり

・重慶軍の實力薄弱

・国民の素養劣悪

〇九月三十日

餓鬼をしのぐへが、如き患者の行為。それをあらしめる病院の給養。

食任運搬の途。炊事のこげ飯。残飯捨場。飯分配後の行為。

逃亡者の続出。へ逃亡してどんな道をとったものか。へ

○下痢便を排出しない下痢。脱肛が原因するネンへ粘液（血液混）より出す、時として消化した硬便を出す。今のところ最も苦しいのは、肛門がピクピクとふるへてゐる不快な感である。下痢と思つて粥食に代へて貰つたが、ここの粥食では生命を支へる事も難しい。リングル等を打つて貰つてゐる重患へ重症患者ならばいざ知らず、普通の患者で掛盒に半分の粥では全く衰弱するばかりである。病院としては相当量炊いてゐるらしいが、分配を受けてくる人間の不徳な行為が、この様な事をあらしめてゐるらしい。へ九月三十日の記らしいへ

○饅頭一箇一万五千円也

○今度こそと思つた後送の話も遂に立消えとなり、九月も終る。

○中途半端な生活。時間の充分与へられた生活。他日必ずかかる暇な機会を何故浪費したかと悔む時があるだらう、と一方では想像しながらどうにもならない生活。人間性のない人生。これがここでの毎日である。死に至るまで悠々と歌を接してゐた人々が羨しい。自分にはとても出来ない。馬鹿氣てゐるとは知りつつ、つい御馳走の話の方へ惹かれてしまふ。大分人間が下等になつた様だ。将来の行方についても、学中心的なものが兎角金銭的な慾に圧され勝である。9.30

○気温急に低下。階下では未だ蚊帳を吊つてゐるのに、寒中の如き寒さ。病衣一枚ではとてもやりきれない。一

日中を「かしは」にてふとんの中で暮す。(二〇、一)へ「かしは」は、かしわ餅のように二枚折にすることか。次に「魚の刺身に茶漬」「柿餅」「小麦餅」「さつま(広島県)」の作り方を記すが今は略す。その間に次の表を入れている。復員後の暮し方で、法金へ※法金剛院の上の○をつけている。▽

○ 招山へ※唐招提寺▽——教學院(仮屋建立マデ僧坊ニテモ可) 戒學院整理、教學院再興(會計執行ノ事)

○ 法金

——就職(大塚へ五郎▽先生 三根へ修一・竜大勤務▽先生一相談) 母、妹を招く

平田へへ夫▽塚本へ二三・共に檀家総代▽氏に意見を聞く(維持策に就き)

法園へ八幡・法園寺▽——同上 へこの表は横書き▽

出寺 故郷の近く

○十月八日。何の所為か、今朝は測々へママ▽と愁しさが込み上げて来て、やがては涙さへ落す様な始末だつた。今日で既に一週間程絶食続きである。何も食ひたくない。ただ甘気へあまけ▽のものゝと水気のものゝが欲しいだけである。これだけ絶食状態が続きながら、不思議にも昨夜から下痢。今朝は水様便。身体は疲労の極にある。九月二十四日へに▽下痢とも痔とも判らぬ病気で床に就いてから、今日で既に丸半月。づつと人の世話になりづめである。特にこの間与へられた北野班長殿の厚意は、とてもここに表せない。若し生命あれば、軍隊生活最後の美しい花として想ひ出すことであらう。

二、三日前より支那側より受給することとなり、殆ど三食共米。而も量もぐつと増え、菜の内容もよくなつて

来た。然し今の自分には何の關係もない。へ住所録によれば、北野班長は北野美代治氏のこと。和歌山県の人。申しわけないが氏についてもすつかり忘れていた。ゝ

○秋の気の冷えひたひたと身に寄する病室（へや）の窓辺に今朝も向ひぬ

○屋外にふつと嗅へかゝきたる通り香の直に想はず故郷へくにゝの粟時期へどきゝ

○為すなくしておぼろおぼろと過ぎて来し己を責むも惰性となるか

○細き腕さびしく撫でぬ今さきをルイ瘦へルイ、原漢字ゝゆゑに逝きし友想ひ

○十月も今日は既に十五日。二、三日後には後送があると云ふが、担送患者としての今の自分は、果してその選に入るや否や。然し今では、故郷に帰るまで身体が保つかどうかは別として、さう切実に早く帰る事を思はなくなつた。馴れて来た所為もあらうが、それだけ弱つて来たのかもしれない。今では下痢も止り、食欲も大分ついて来たが、極端に痩せおとろへてしまつた。四日程前に体重測定をしたところ、僅か三十六匁。かかる事は生来最初の事。今の容態へとしてゝは、午前中気持よく、午後になると寒気がし、夜は暑苦しく、寝汗が出る。検温すると朝五度代、夜同様であり、全く結核の徴候であるが、軍医殿はまだ何等そうだとは云はれない。マラリヤの検血を終つただけ。

○午後より始つて夜中に至る熱は依然としてとれない。昨日の山下診療主任殿の回診でマラリヤだらうと云ふ事になり、今日からその薬を服用。下痢の方が心配である。食欲は殆ど以前に復し、便通も普通であるが、何時下痢になるとも判らない状態。体重測定、三八、二〇〇。一週間前に比べて二匁程増加。（一〇、一八）

○夜殆ど眠れない。便器の傍に寝て、がちやがちやいふ音と、便のほひで余計眠れない。寝汗は依然として止まらない。マラリヤの薬を飲み出してから熱は引いた。(一〇、二〇)

○へ去るゝ今月九日階下の二十六号室に移つて来てから既に三名死んで行つた。それらはすべて衰弱の果ての絶命であり、皆下痢で衰弱してゆくのである。今更ながら下痢の恐しさを知つた。身体の肥えてゐるときには、下痢など大して心配は要らないが、我々の様に、十貫目足らずにまで瘦せてしまつたへ様なゝ者には下痢は全く命取りである。(一〇、二〇)

○貯金が内地金の九百円まで出来ると云ふから、そこらの人々から儲備券五千円近く貰つて入れて置いた。持つてゐる者は実に多く持つてゐる。然しこれも役に立たないのだから、余分にある分は反故に等しい。でも此方は御蔭で九百円程拾つた訳。(一〇、二〇)

○昨夜も亦一人死んで行つた。夕食後水をくれ水をくれとせがみ、くれないままに「水はおいし：：」へ流行歌のパロディーゝ等と歌をうたつてゐたが、それから数時間後には息をしなくなつた。これも矢張り衰弱の上の下痢がもとである。へ戦争栄養失調症であらうゝかくなるには、自分の不注意や克己心の足りないためもあるが、誰も面倒を看てくれる者のない病室で、砂糖水を欲しがりながら、与へられもせず死んで行つたのを思ふとはれである。小さい妹と弟があるので、慰問袋の玩具類を持つて帰るのだと、風呂敷一包にしてゐたとか。彼の遺留品は、だが無惨に塵箱に捨てられ、実家へ送られる品物は、既に室長によつて目ぼしいものが抜かれた残りである。食事の事と云ひ、全くこの二十六号へ室ゝの独歩患者はのろはれてよい。彼等は重症患者の膏血をしぼ

つては隊の如く太り、担送患者の世話もせずして如何にも勤へ努めてやつてゐる如く恩をきせ、一度心へ氣にくはぬ事があれば患者をなぐりとばす。かかる奴輩へやつばらへは将来延へ伸へびもしなければ、人にもうとまれる人間であらうが、實際パチでもあたればと叫びたい。(一〇、二三)

階級の上下、不規律——敗戦の一因

○早朝の爽快な空気に接しては、花園や招提の朝を想ひ、遂に今年の秋を逸した事が未憐へ練へてたまらぬ。(一〇、二三)

○十月二十五日 体重測定 三四、九疋

一週間前より四疋も減少、甚だ心配である。瘦せた者がどんどん死んでゆく現況を見ると、次に来る者は誰か、と淋しさ此の上もなし。

○法金剛院仮修繕

- 1 屋根葺代へ替へ
 - 2 茶ノ間改良、七帖間改良
 - 3 台所横押入撤去
- 以上急務 へ次に見取図を描き、次ニ風呂場ノ位置転換、納屋へ廊下連絡、旧部屋復活、五帖間ニ廊下ヲ設ク、但シ残部ノ利用可考へか
んごうべしへと添記へ

○船の気笛が、まだ明けやらぬ後夜へごや・夜あけ前への病室にまで聞えて来る。そぞろ帰国の渴望をそそりはするが、このところ全く後送のうはさすらない。かうなると徒へいたずらへに帰りをあせるよりは持久の心構を固めねばならない。食欲が出て来たと云ふものの、肛門からの出血多く、便は硬いが音のする放屁は一度もない。

余程用心しないと危い。もう少しは肥えて船に乗らねばならぬ。あせらずに自重自愛せよ。(一〇、二七)へ患者輸送の危険に対する認識は甘かつた。▽

○階上の三十五号室へ帰れるのが大分可能性を帯びて来た。二十七号室は兎に角暗い。気分的に参つてしまふ。班長はじめ数名の行動に対する憤マンへ原漢字▽の情に堪へない。食事分配の出鱈目、実に眼に余るものがある。担送患者の世話々々と恩にきせながら、傍若無人の振舞、天罰があつてよい。どうにも面白くない。一日も早く階上へ行きたい。(一〇、二七)へ次に「法金剛院復興計画」と題して境内堂宇の配置図を描く。

○法金剛院財政私案

・平田、塚本両氏トノ相談

・日常生活費ノ不足

・右ヲヘノ▽打開策トシテ、先ヅ貸家新築。右ハ復興図へ前の配置図▽トヘヲ▽参照シ、境内西側ノ藪地ヲ利用ス。或ハ本堂南側利用。貸家建造不能ナラバ貸地ニテ辛抱。

・湯浅氏所有地ノ買収

—————

○マラリヤの薬を十日も飲んだが、それも終り、並食に復した。相変らず排便の際出血が相当量あるので気になるが、漸次食欲も順当になり、便も下痢から速のいたので幾分か明るい。全身はまだ倦怠感大きく、歩行にも力がないが、今までの様に寝てばかりゐず、半日以上を坐る様心掛けてゐる。早く丈夫にならねばならぬ。今は何

時死の淵に転落するかわからぬ危い状態である。(一〇、二九)

夜 来 庵 か ぜ だ よ り 一 若い日の森田曠平

(一五) へ前号(一三)は誤

へ一九三七(昭和十二)年 十二月十五日 付、午前消印。手紙。

お手紙拝見した。十三日夕刻 返事を長く書いたのだが 一日置いて読み直すと、何だか嫌になつてそのまま出さなかつた。大変おそくなつてすまない。

君の気持もよく分る。暗い世界からポエジイをひき出すことは正しい芸術だ。墨東綺譚のお雪さんだつて娼婦だ。しかも彼女はマドンナの様に崇高だ。

しかし 左翼的な方に走ることはいけない。君位の人だから そんなことを僕が喋々するまでもなからうが 現在の日本に於ては 許されない。さういふことは 自己のみならず 幸福な生活を営んでゐる人々に対しても 出来ないことではなからうか、

君のお父さんやお母さんが、君がその様な思想を持つたとしたら どんな気持になられることか。又 現在の社会状態も そんなことを考へてゐるべきときだらうか。食ふか食はれるかの重大な時に(もし食はれると想像してみ給へ) 真に日本人の自覚の必要な時に 君はあまりにも個人主義に傾きすぎてゐる。それは君の家庭(充分僕とても知らないのだが 君の今までに話してくれたことを考へて)に 重大な原因があるのだらうが 僕は

それを超越せよとは決して言はない。忘れよとも言はない。ただ君に日本人としての自覚のもとに苦しんでほしいと思ふだけだ。しかしこれは君が西洋の詩を好むと言つたことに対して言ふのではない。

マルクスは理論としては正しいのだからが、実践の不可能なことは誰でも知つてゐる。(僕とてもマルクスなんか読んだこともないのだが) 今までそれを実践運動にうつした人々は皆、所謂、神に見はなされた人々である。今さらここで宗教の問題に触れるのではないが、神に見はなされたと思つても、神は決して見はなしてはゐないだらう。彼等は虐げられて暗い一方しか見ることが出来なかつた。つまり見かたが足りなかつたのだから。

だらうかへママ、君だけは強く正しく生きてほしい。これは僕の切なる願ひだ。暗黒を追究しても、正しく見つめてほしい。大塚先生だつてもし君の左翼云々の言葉を聞かれたら、恐らく驚いてしまはれるだらう。そして心配されるだらう。御両親のみならず、先生にまで心配をかけるといふことは、大變不孝ではなからうか。ではもう一度頼む。もつともつと強く正しく生きて呉れる様に。

試験でも済んだら一度遊びに来てくれ給へ。そしてその時には右に書いた様なことはすつかり忘れて愉快に語らう。眼交に枯れし芒の原ありて水白じろと流れぬしかな。

北山のしぐるる朝は山茶花の白くこぼれぬ庭の湿りに。

歌は出来ない時はあまり無理に作らぬ方がよからう。小生今月十首しかない。無理をするとイヂケてしまふ。出る時まで待つべし。

原田君

夜来山房主人

大塚先生 水壺同人となられた。先日大矢氏宅にて幸節静彦氏に会つて陶器の話をした。へ大矢・幸節氏は水壺

の同人

追伸　ゴゴリの狂人日記は非常にいいから読んでみ給へ。トルストイの民話集を読み直してゐるが大変いいものだと思ふ。あまりにも神様が出て来すぎるが。

先日　大塚先生と街を散歩してゐたら、大矢氏の家の方まで来たので　ちよつと寄つたら　幸節氏が来てゐて一時間程色々話した。大変感じのいい人だ。先生よりお先きへ帰つた。

幸節氏曰「この頃は陶器を集める方が歌より面白うなつた。そんなこと言つとつたら松田へ常憲氏に叱られるかもしれないア　ハ……」

曠平註　但当日買ったものを見せてもらつたがガラクタばかりだつた。

へ以下は上部欄外に横書き

狂人日記最後の一節　お母さん！（中略）悩める頭にせめて涙でも一滴くそそいで下さい。これこの様に酷い目にあはされてゐるのです。その胸に可哀さうなこのみなしごを抱きしめて下さい。広い世の中に身の置きどころもなく、みんなから虐めつけられてゐるのです。お母さん！この病気の息子をあはれんで下さい。……
ええとアルジェリアの総督の鼻の下に瘤のあるのを御存じかね？　（終）

十二月　十六日　午後消印。はがき。

お手紙拝見した　君の気持よく分つた　前に書いたことは全部小生の誤解、以後忘れてくれる様に

玄誠堂へ書店への注文は出したが　追注分（ひこばえ）を出したいと思つてゐたのでこれからすぐに出して置

く、荷風「墨へ東へ綺へ譚へ」私家版注文したが売り切れだつた

十二月二十日 午後消印。はがき。

本のこと 注文したが本日全部品切れとの通知を受け取つた。邪宗門（白秋）三版買つた 内容もなかなか素晴らしい
へ松田へ常憲の三径集も通読しようと思つてみます

十二月二十四日 午後消印。はがき。

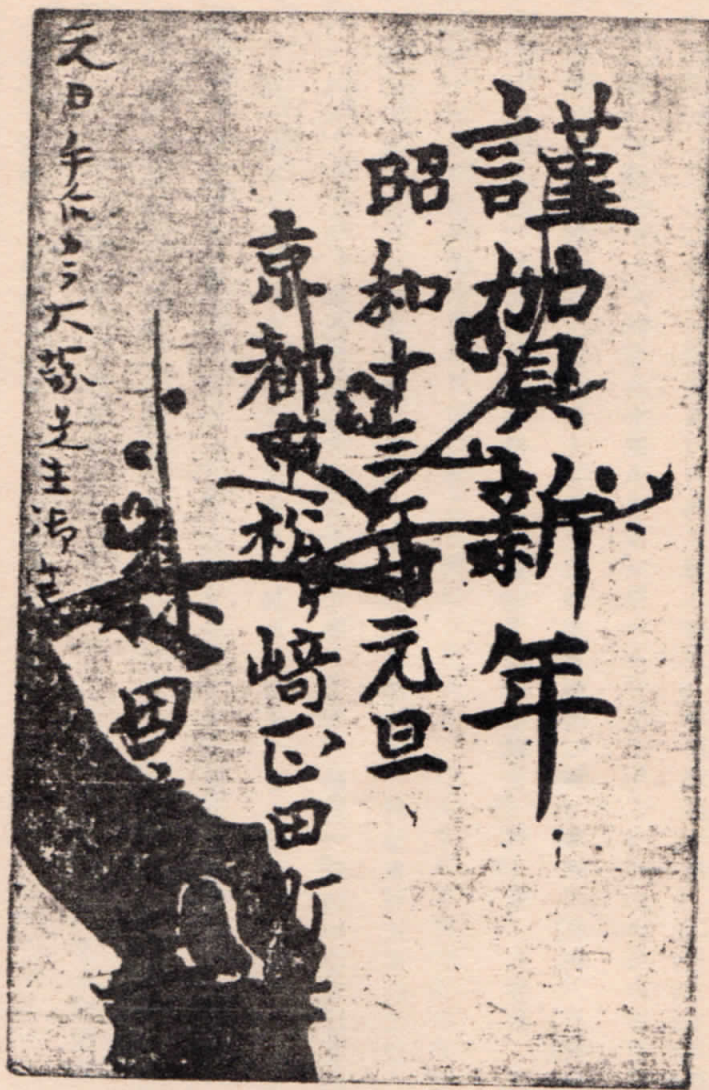
おハガキもらつて返事が大変後れて失礼。

へ『水壘』のへ月集に昇進のことについてへ大塚へ先生よりお便りを頂戴した、金沢へ種美へ氏廻なので嬉しくもないし 第一趣味で片づけられるので不平だ、加地へ富子へさんでないが歌に対しての熱が冷えてしまふ、これは君とても同じだらう、結社に入らず自分一人で歌ふのが 結局一番いいのではなからうかこの頃思ふ、

へ島木へ赤彦の真面目は太虚集以後にある、切に熟読を薦める、柿蔭集等に至つてはへ斎藤へ茂吉氏ではないが歌の極致を示すものだらう、

へあまり確かな記憶ではないが、当時、『水壘』では短歌欄を、同人集、水壘集、月集、詠草の四つに大別し詠草で成績がよく年間に四、五回以上特選となつた者が次の年、月集に進み、月集から水壘集へ、水壘集の優秀者から同人が選ばれた。詠草から同人まで、早い人でも十年くらいかかるのが常であつた。昭和十三年一月から森田君は（そしてたぶん原田も）月集に進んだが、森田君は一月、二月とも欠詠、わたしは一々四月欠詠したらしく切抜帳に作品がない。へ

一九三八（昭和十三年）年 一月一日 午前消印。はがき。木版年賀状。



『水鏡』三月号詠草。

庭の雪

わびすけの澄みてま白き花の上雪は雄蕊の黄ににじむなり

「元日午後カラ大塚先生御宅へユキマス」と書きそえてある。

わびすけの白き一重の花の上雪は陰もつ寒くするどく

恙ありて

終日（ひもすがら）人を待ちつつ外の面には雪のふかきときくがひそけさ

栗はみて畳に皮を拾ひけり夜はの座敷にあまるひそかさ

洛北の朝

比叡ヶ嶺は朝あらはれず霧ごもり鴉鳴きゆく声の間近かさ

畦路に馬のだく踏む息白し背（せな）に朝日のややあかくして

畦づたひ登校（ゆ）く子の後姿（うしろ）黒み見ゆ霧を通して陽ぞかそかなる

へこの号だけ「守田耿平」の筆名を使用。なお選者評に「しみじみとした味を持つてゐる。テニハのハタラカ

せ方習練あるべし」という。

『水壺』四月号詠草。

三保の松原

しろじろと風に吹かるる鷗めて渚はさむき松風の音

さわだてる潮のけぶりは間近くて真日に深え入る松風の音

磯ひわへ原漢字への鳴くや真昼の浜づたひ潮のけぶりを浴びて歩みぬ

著く波高まりて昼の海や聞きとめがたき磯ひわの声

茜さす屋の光はさびしくてまさまじく凍ゆる冬の富士かも

うつしみのさびしさ保（も）ちて三保の浜既に真白き富士に向ひぬ

樽牛の墓にて

聞き澄めば海の遠音のなほ聞ゆ墓石（いし）を秘かに撫でつつぞ聞く

竹藪

竹藪の秀のゆれ白き夜の更けや月の下びにがそかなれども

評。やつぱりきちつと格にはまつてゐるのは快い。

四月十六日 午後消印。はがき。

手紙の内容 紛失の由 格別重要なことも書いてなかつたが 何時ぞや小生 ワトリーの芸術に品格を認めぬと言つたが あれは失言だから取消してほしいといふ事を ちよつと書いてあつて その他は徒然なるままの寝言にすぎず 以上

『水壺』五月号詠草。

時雨雲の降らすは雪となりにつつ夕方まで開く佗介佗（わびすけ）

況々と咲きて真白き佗介椿にたまゆらたまる雪あはれなり

木の蔭にひと本寒き佗介椿の白さ目にしむこの夕べかも

白雲のたゆたふ空のいやはてに上り尽して雲雀は鳴くも

竹藪の茎立ちあらしき間には見えて乏しき修学院のお灯（あかり）

評。云ひ方に苦心の足りない為に、折角持つてゐる特種な感覚力を殺して了つたのが多い。試みに朱を加へたものに就いてへ以下欠。なお六月・七月号は欠詠なのか、切抜きが失われたのか、不明。

五月・七日 付、午後消印。手紙。墨書。

枯魚兄 その後は御無沙汰ばかりしてゐるが 兄には 元気で 勉強してゐることと思ひます

小生はその後 盲腸炎をやつて未だ病床にあり しかへ原漢字へし殆ど快方に向つてゐることとて 乞御放念

又 今 親戚の者が大勢来たりしてゐて気分落ちつかなくつたが 再びそのうちに 来訪する予定なので 取込

む事と思ふから 御見舞御無用に願上ます 何れカイへ原漢字・心十灰へ復したら 小生の方から一度上ります

同封の招待券 君がよいだけとつて（と言つても少いけれど）後は 大塚先生にでも上げてくれ給へ、小生も

そのうちには 観に行くことも出来ると思ふ、

小林柯白先生の花菖蒲 見てくれ給へ 夜来山房主人

へ小林氏は森田君の日本画の師。『森田曠平展』（昭和五十六年）年譜には「昭和十五年（1940）二十四歳

小林柯白（当時、日本美術院同人）に師事する。」とある。

六月 一日 付、午後消印。はがき。

冠省 李長吉詩集写本 天地二冊（巻三まで）入手 金四十銭 字も良いし 少し虫は這入つてゐるが感じのよい本也

奥書に 某珍藏 とあるから 昔より相当の珍本らしい それで満足なら暇の折にとりに来られたし 君の氣に入らねば小生がもらつて置く

『水壘』八月号詠草。

昼の蚊の部屋を流れてゆきにしが眼(まなこ)つかれて打つよしもなき

夕近く浅き眠りゆさめし眼にうつぎの花のほのぼのと白し

雨の音ひそかなる宵の灯へ※ともしび?により来る虫らよろほひにけり

病いまだ癒えぬ日頃の苦しさを人には軽く言ひやりにけり

九月 二十 二 日 午後消印。はがき。

九月八日送つた葉書見てくれた事と思ふが、現在も大体あの通り。心配する程度ではないにしても油断は少しも出来ぬから 只管静養してゐる。

大塚先生移転の件おハガキ戴いた。へ森田へ直一兄は元気で勤務の由めでたしめでたし。面会は謝絶してゐるが手紙は戴くとうれしい。

へ右の「九月八日」のはがきは原田の手許で失われたらしく、のこっていない。森田君の病臥は以後、年末まで続き、原田あて通信も『水壘』詠草もない。原田もこの年と次の年は、日記もなく『水壘』への出詠もまばらであつた。へ

王介甫・曾子固は、その散文は西漢の文章のように堂々たるものだが、小詩型の詞を作ると、人はきつと大笑いした、読めないのだった。そこでジャンルの違いが分るのだが、これを知る人は少い。後に晏叔原・賀方回・秦少游・黄魯直が出て、始めてこれを知った。だが、晏氏の作品にははなはだ描写がなく、賀氏のははなはだ典重さが欠ける。秦氏は感情表現に主眼をおき、知的うらづけが少い。譬えば貧しい家に育った美女は、きれいでふっくらしていても、富貴といった感じには乏しいようなもの。黄氏となると知性を尊重するのだが、欠点が多い。すぐれた宝石にキズがあるようなもので、価値はおのずから半減する。

王氏(一〇二一—一〇八六) 名は安石。神宗の朝に宰相となり、急進的な政治改革をやった、いわゆる「新法」の創唱者。蘇東坡がその反対者であること、王氏の亜流が後に酷い反対者弾圧を行ったこと、等々から、時には一世紀前漢末の王莽とひっくりかえしてそしられることがある。今の中国ではむしろ評判はよく、要するにまだ政治家としては評価の定まらぬ問題の人物である。しかし、散文家としては、次にふれる曾氏とともに、世にいう「唐宋八大家」のひとり。「西漢の文章のようだ」というのは当時の批評用語としては、ほとんど最高、というほどの意だ。伝統詩においても、蘇氏ほどの大きさはないものの、蘇氏とともに宋の代表作家である。詞は三十首前後現存し、「桂枝香」が有名だ。

登りきて眺むれば／古き都はまさに晩秋／天氣きびしく／千里澄む江は練り絹のごと／翠の峰は群立ちぬ／

残る陽かけにゆく帆くる棹／西風にはためき／酒場の旗ななめなり／いろどりし舟に雲淡く／河面より鷺と
びたつ／絵筆だに描きがたけれ／おもへば昔／華奢きそひ／あはれ門外楼頭に／悲劇あひつぐ／千年のの
ち高処より／興亡の跡に對ひて嘆くかな／六朝の旧事は水と流れ／ただ寒き露／香る草緑濃し／今も歌ひめ
／つねうたふ／後庭遺曲

金陵懷古のこの作、たちまち三十数人の唱和者を出し、蘇氏は聞いて「古狐め」とその老手に感嘆した。とは
いうものの、他に三、四見るべきものがあるだけで、詞は余戯にすぎぬ。

曾氏（一〇一九—一〇八三）名は鞏。この人は詩も得意でなく、詞は一首のこつていだけ。清照の批評は
この人に対する場合いかなる者も文句のはさみようがない。

さて、李清照が、詞のジャンルに精通した人として挙げる晏氏ら四人のうち黄氏は詩において蘇氏と並称され
るが、他の三人は詞人として文学史に名をとどめる人。それだけに彼女の批評もきびしくなる。

晏氏（一〇三〇？—一〇六？）名は幾道。さきに述べた晏殊の第七子。貴族の公子だが官僚としては低い
地位にいて、しかも例の新旧両党の争いにまきこまれ入獄したこともあり、早く官界を去り、貧窮のうちに死ん
だらしい。まず作品を掲げよう。「木蘭花」（玉楼春）。

あひそめてすでにうらみき　しることのおそきにすぎし／あひわかれまなこをさらず　まさまざとこほしす
がたの／しとねにはなほのこる　ありしひのひとのうつりが／ゆめさめてねがへるところに　あふるるやしと
どのなみだ／あはれあはれひとしらし　むらぎものたまけぬるもひ／いてかへるいくよるよるを　むしぶ

すまむすひともなく／わがおもひせめてこむよに　とげむとぞこひのめど／はたや　こむよのちぎり　いかにせむみちかかりなば

「詞論」のなかでわたしが「描写」と訳した原文は「鋪叙」、主として事物の描写をさすが、作品の主観・客観描写の配合の適切を含めていつているらしい。右の「木蘭花」は主観描写としては完璧である。事物の描写がきりつめられることによって、どこにも出口のない孤独に閉じこめられた、恋する女を失った男の悼亡の感情が白描となつてここにある。極めて感傷的な感情をうたった詞だが、作品を構成する手法はさえていて感傷的ではない。ただ、作者がそれを意識していたかどうかはわからない。かれにふりかかつた不幸が、平生練磨した技術と結びついて、この作品を生んだ、といえようか。かれに主観・客観描写が配合された作品がないわけではない。たとえば「臨江仙」。

夢のち楼台は高くとざし／酒さめてとばり低く垂らしたり／こぞの春のかなしびのかへりこしとき／ちる花にわれひとりたち／ぬか雨につばめ連れ飛ぶ／わすれめや小顰をみそめしときの／心の字ふたつ重ねしうすごろも／琵琶のいとに奏でし想ひ／その夜も月あかるくて／あやなす雲と帰るきみ照せしことを

かれの詞をただ一首あげるとすれば誰もが指す代表作である。ただ、このようなまどかもの^{まどか}のは少く、「玩郎帰」。
移り香はさきの日に似たれども／ひとのこころの似ざるかなしさ／春はなほ数行の文ありしかど／秋さればさらにとほしき／^{しと}衾さむく／枕さびし／酒くみて愁ひ払はな／夢に逢ふはむなしかりとも／^え堪へむや夢だになきに

のように主観描写に傾くものが多い。柳氏のような、まして蘇氏のような事物の客観描写はほとんどない。わたしなどはそれを晏氏の作風としてうけとるのだが、そこにはただ読んで楽しむだけの立場にいる無責任さがあることは顧りみられ、作者として詞の向上に腐心する彼女が、晏氏に事物の客観描写にもっと努力してくれれば、と齒がみする方が、親切な批評家のありかたであろう。

賀氏（一〇五二—一二二五） 名は鏑。身長七尺、顔面鉄色、「賀鬼頭」のニックネームがあった。権貴にはばからず、談論風発、書の大家で石きちがいといわれた米菴と終日討論して譲らなかつた、などエピソードの多い、しかし万巻の蔵書を校訂する謹直な面をあわせもつ人だつた。秦・黄両氏より若いのにさきにとりあげたのは、客観描写にすぐれ、晏氏と対照させるのに都合がよかつたからだろう。「泊上郎」

舟は、やぶざと港でて／雨の大河わたります／ほんに無情なふたつの櫓／キイコオと人のことばに似はしても
／ぬしはくるわで金をまく／わたしは山で石となる／あなたの心をつなぐのは／三つになつたむすめだけ
もうひとつ「浣溪沙」。

お城では太鼓ひびき暮れの鴉がなっている／行きすぎる雲がよこした雨すこし／カーテン透して冷いやりと
水のように／西の離れの戸をたたく月の影／東の庭で香りふりまきそよぐ花／このときたがいに見つめあう
天のはて

「おれは李商隱や温庭筠を筆先でこき使うのに忙しくつとてても暇がない」といつていただけに、中晩唐のすぐれた詩詞から自在に警句秀語をやとつてきて、巧みな小楽府を作る。「浣溪沙」には主観描写は全くない。し

かし唐代の小説「鶯鶯伝」の語を使うことで、ひそかにランデウーをしようとしている男女の心情が、読者の心のなかにそれぞれの読者に応じてイメージが結ばれるように構成されている。腕の立つコックの料理した西洋料理を食べるような気がする。それが賀氏の詞を通読しての感じて、「青玉案」はその上々なるものだろう。

波しのぐ女神は横塘の路に訪ひ来ず／去りゆきしあと見送るばかり／錦の瑟に華やぎし年たれと教へむ／月の橋　花の庭／飾り窓　朱の戸も／知るものはただ春のみぞ／青雲のただよひてか、いふひ香る夕べ／筆とりて断腸の句をあらたにしろす／すずるなる愁ひそもいくそばく／川の面にかすむ草／町おほひ風にとぶ柳のわた／梅の実を黄にそめて降りしきる雨

だが巧みが目につき、うまさ舌になれると、あきてくるところのあるのもやむをえぬ感情で「典重さに欠ける」と李清照の評したのはそこらの消息を述べたのであろうか。

「典重」は批評用語としては恐らく彼女が作ったもので、その前には用例がないようだ。だから常識で判断するほかないが、たぶん典雅渾厚というほどの意をこめたのであろう。

秦氏（一〇四九—一一〇〇）名は觀。三十歳のとし「黄楼賦」を蘇氏に贈り、屈原・宋玉の才がある、とほめられ、蘇氏からその詩を紹介された王安石が六朝の鮑照・謝靈運に似ていると批評して、文名があがった。三十八歳で進士、四十歳で太学博士、のち国史院編修官となったが、四十六歳、旧法党だとして中央から放たれ、地方を転々とした末、道路で死んだ。これを聞いた師の蘇氏は「かれのような人物がまたこの世に存在しようか」と嘆いた。蘇氏が豪放派の代表詞人であるのに対し、かれは婉約派の代表とされる。なよやか派、とでもい

えようか。すなわち「詞」なるジャンルにおいての伝統をうけつぎ発展させた正統作者である。「満庭芳」。

薄雲を刷きし山／衰へし草つけし天／城門の角笛の声たえぬ／しばし舟とめ／別れの酒をくまんかな／蓬萊
閣にありし日のさまざまのこと／見かへれど／籠ぞたなびく／うすづきし陽に／寒げなるあまたの鴉／流る
る水は村めぐるかな／魂消えぬ／いまはとて／香の袋そとひらき／うすぎぬの帯ときぬ／わが得しは／青
楼薄倖の浮名のみ／この後はいつかあふべき／襟のへに／むなしくも涙のあと／高城の眺めたえ／灯し火は
すでにたそがれ

三十代初めの作。古人の詩句をほとんどそのままあちこちにはめこみながら、それが全くかれのことばとなっ
ていて、恋人と離れ遠く旅立たねばならぬ男のつらくわびしい感情がしみじみと流露する。「踏沙行」。

楼台は霧にきえ／月に迷ふ港への路／桃源を望めどもゆかむすべなし／えたへむや春寒き旅の館の独り居／
ほととぎすさへづるうちに陽はかけりゆく／駅にかづけん梅の花／鯉にふくめしたまづさ／つもるかなし
み数しれず／杉江はおのづから杉山をめぐれども／たがために瀟湘に流れゆくらん

「杉州（ちんしゅう）旅舎」という副題がついている。湖南省の東南端に近いまち。次は「千秋歳」。

水べ沙のへ／城郭に春の寒さはしりぞきぬ／花かけ乱れ／鶯の声ささめく／おちぶれて酒うとましく／離れ
ゐて帯もゆるびぬ／ひと見えす／青雲の夕たなびくをただ目守るのみ／／おもふ昔 西池の宴に／同僚とと
もに遊びき／そこに今／いますはたれぞ／日のもとに夢たえ／鏡にかんばせやせぬ／春逝きぬ／千万の紅飛
んで海のごとき愁ひかな

かれの死のほとんど直前の作らしい。「淡雅清麗」「和婉醇正」「詞中の上品」「純乎たる詞人の詞」かれの作品をひとたちはこのように批評する。そこが李清照のことばでいえば「きれいでふくら」した「美女」ということになる。一面「情乎として」詩経、小雅の遺へ風を得たるは、へ南唐、後主の後にへかれ一人のみ、あるいは、官僚として不遇だったので「疎放の風除かず」といった批評があり、「貧家に育ち富貴の気象にとほしい」という彼女の批評に共通する。

黄氏（一〇四五—一〇五）名は庭堅、号の山谷によって知られる。二十三歳で進士、二十八歳で北京国子監教授、蘇氏に詩才を見出され、やがて起居舎人に進むが、左遷され地方官として転々しつづつ終った。不遇にめぐらず、学問にはげみ、その詩と書において師の蘇氏と並称され、わが国の禅宗、ことに五山の徒に敬重され「東坡・山谷・ミソ・ショウユ」の語が生れた。必需品という意である。「清平楽」。

春はどこへいったのか／ひっそりと路もない／春の行くえを知っている人がもしあれば／喚びもどしいつしよに住もう／春には足あともない 誰か知らないか／うぐいすに問うよりほかはないのだが／あのおしゃべりを翻訳できる人がない／風にのりバラの花むら飛んでゆく

もうひとつ、「満庭芳」。

濃青の遣り水／淡緑の木々／翠の光に照りあかるあずまや／錦のおしどり霜の蜜／はすのこみちで水運つづく／渡しばの欄干くねり化粧姿うつす／窓のカーテン／夜風すずしく／横塘に月満ち／水面を移る星／おや／雨だ／ゆらゆら漢がゆれ／ちらばる浮き草／そこで床几をうつし／竹むしる小屏風／たちまち霧がいつ

ばい／声のときれぬ／軒の風鈴／うたげ再開／池に雪沁み／山あらわれて青い仏頭

同じ「満庭芳」でも秦氏の作となんと違うことだろう。主情と主知、その対照がこの二人におけるほど鮮かな例はまれだろう。二人はたがいに相手を尊敬していたようだ。「千万の紅飛んで海のごとき愁ひかな」、あの「千秋歳」の結句にぶつかつた黄氏は、参つた参つた、と唱和することを断念した。黄氏の茶をうたう「満庭芳」が秦氏の詞集中にも見えるのは、たぶん秦氏が感心してノートに書きとめておいたのを、後に集を編んだ人が秦氏の作と誤つたのであろう。おのれに乏しいものを相手に見出していたのである。

黄氏の「念奴嬌」に「最愛臨風笛」の句がある。「わたしはその原稿を見たことがある。今の俗本は『笛』を『曲』に改め韻を合わしているが、いけない。しかし笛では韻に合わぬことも確かだ、おかしいなと思つていた。四川に住みそのことばになれると、笛を『独』と同じように発音する地方があることを知つた。黄氏はそれを面白がつて詞に使つたのだ」陸游がそんなことを書いている。ヤクザのことば、ゲスなことばを使って興がるくせもあつた。「ニコヨン」を訳詩に使い二十年後に改めた体験がある。俗を身上とする詞でも、何でもぶちこんでよいわけではない。「玉にキズ」とはそのことをいつたのだ。

「詞論」は、まだ続く文章をぶち切つた形で終つている。わたしには、そう感ぜられる。言うべきことは言つて、加えれば蛇足に違いない。だが、中年以後の定稿ならやや違つた形になつたのではなからうか。この詞論は、多くの人には愛されないかもしれないが、愛しない人たちをいらいらさせながら、やっぱり卒直で的を射た名批評だと、老いぼれて卒直を失いはじめたわたしには、ほればれ眺められる。

一九八四・八・二七